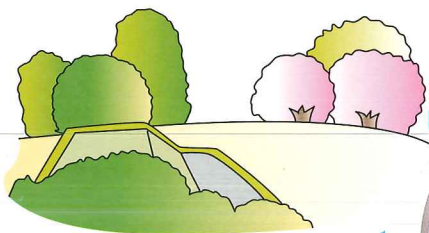


【佐倉地区】

A

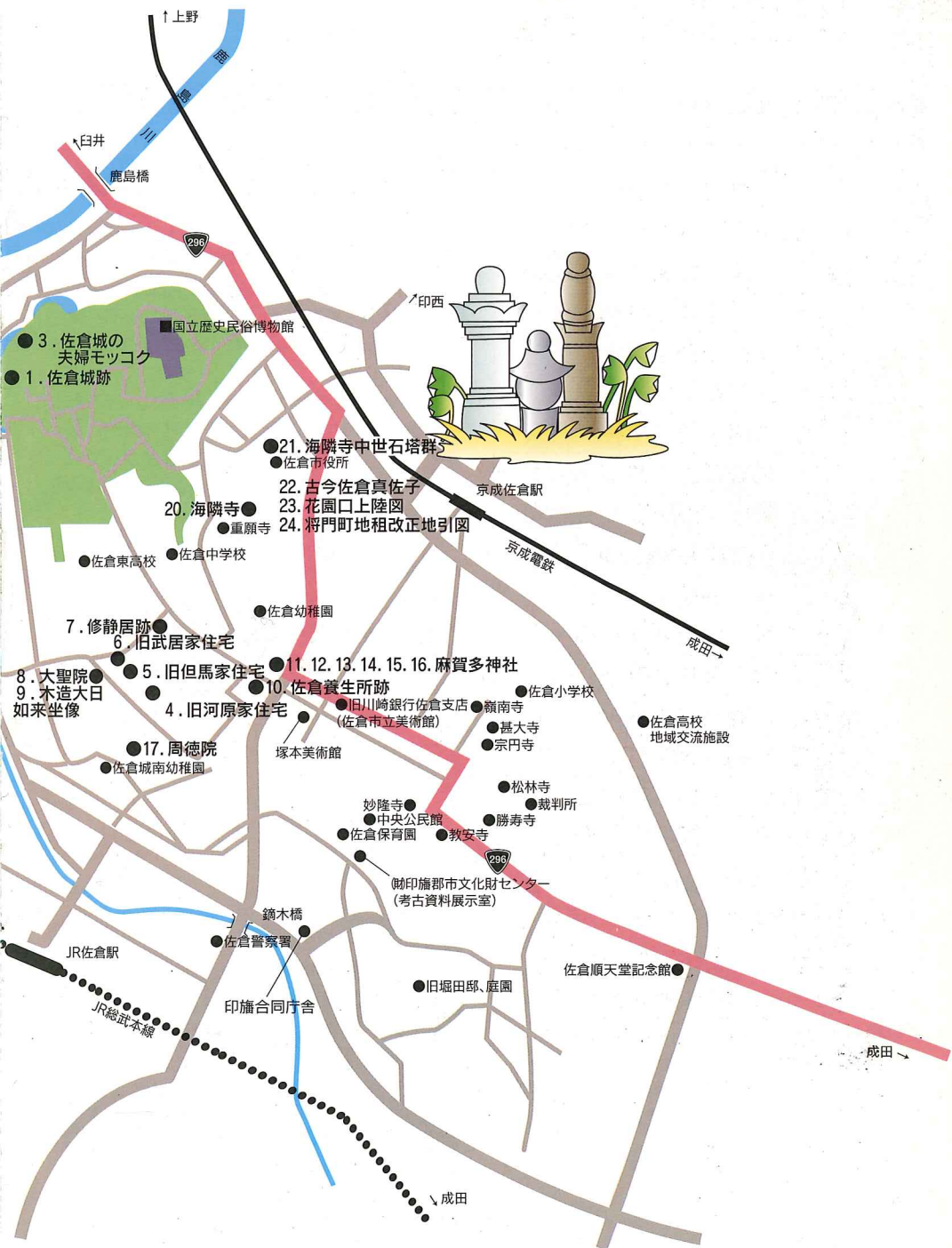
- 1. 佐倉城跡 (城内町)……………24
- 2. 佐倉城城門写真原板 ……………24
- 3. 佐倉城の夫婦モッコク (城内町) ……25
- 4. 旧河原家住宅 (宮小路町)……………25
- 5. 旧但馬家住宅 (宮小路町)……………26
- 6. 旧武居家住宅 (宮小路町)……………26
- 7. 修静居跡 (宮小路町)……………27
- 8. 大聖院 (鎗木町) ……………27
- 9. 木造大日如来坐像 (鎗木町)……………28
- 10. 佐倉養生所跡 (宮小路町) ……28
- 11. 麻賀多神社 [香取秀真おいたちの地] (鎗木町) ……29
- 12. 麻賀多神社板絵馬「藤戸の渡し」 (鎗木町) ……29
- 13. 銅 釣燈籠 (鎗木町) ……………30
- 14. 銅 麻賀多神社印 (鎗木町)……………30
- 15. 麻賀多神社神輿 (鎗木町) ……………31
- 16. 紫裾濃胴丸 (鎗木町) ……………31
- 17. 木造薬師如来坐像及び両脇侍立像 (鎗木町) ……32
- 18. 槍 銘細川忠義 (鎗木町) ……………32
- 19. 銅 大国主命立像 (鎗木町)……………33
- 20. 海隣寺 (海隣寺町) ……………33
- 21. 海隣寺中世石塔群 (海隣寺町) ……34
- 22. 古今佐倉真佐子 (海隣寺町) ……………34
- 23. 花園口上陸図 (海隣寺町) ……………35
- 24. 将門町地租改正地引図 (海隣寺町) ……35



高崎川



千葉





1

さくらじょうあと 佐倉城跡



佐倉城跡のある台地は鹿島山といわれ、戦国時代に千葉氏一族の鹿島幹胤が城を築いた地と伝えられています。この鹿島山には江戸時代初期に久野氏二代と小笠原吉次が領主として入封しました。この後、慶長15年(1610)から土井利勝が領主として入封し、利勝は翌慶長16年1月から元和3年(1617)まで7年間をかけて佐倉城を築きました。

城内は本丸・二の丸(出丸を含む)・三の丸・惣曲輪(椎木曲輪・広小路・中下町・大下町など)・根曲輪から構成され、天守・銅櫓・角櫓・本丸御殿・一の門・台所不明門・対面所・二の門・城米不明門・三の門・椎木門・米蔵・大手門・田町門・会所・鹿島橋門をはじめとして多数の建造物が配置されました。

明治6年(1873)1月、佐倉城内に陸軍第一軍管東京鎮台の佐倉営所が置かれるようになると、城内の建造物は順次取り壊されていきました。



2

さくらじょうじょうもんしゃしんげんばん 佐倉城城門写真原板

この資料は、旧佐倉藩士阿部武次郎の長男阿部忠忱が、明治初期に撮影した佐倉城城門写真のガラス原板です。嘉永6年(1853)に生まれた忠忱は、写真撮影の技術に関心を持った人物です。

原板は、大手門(表側、裏側)、一の門(表側)、三の門(裏側)、椎木門(表側)の5枚が残されていて市指定文化財となっていますが、この他にも二の門(表側)、解体中の銅櫓の写真が伝わっています。

これら写真からは、二階造りの櫓門であった城門の形状ばかりでなく、城内の広小路や二の丸にあった武家屋敷の土塀・板塀や屋敷門の状況、樹木が繁茂した様子などがわかり、貴重な歴史資料です。





3

さくらじょう めおと 佐倉城の夫婦モッコク



庭木として重要なモッコクは、ツバキ科モッコク属の常緑高木であり、清澄山より東海道以西、四国、九州の近海地方に自生しています。赤みを帯びた新芽の時、夏の花の時、秋に紅色の種子を現した時、冬には黒みを帯びた葉と、四季折々様々な変化を見せてくれます。

佐倉城跡の夫婦モッコクは、本丸の天守閣跡脇に植えられており、樹高11.6m、目通り幹囲2.6mを計ります。モッコクの成長は遅く、これほどの大樹になるには相当の年月が必要であったと推測されます。

この夫婦モッコクは3本が接しており、そのうち幹の下部で2本が合体していますが、もともと2株植えられたものの1株が夫婦モッコクとなったものか、3株寄植したものの2株が癒合したものかは明らかではありません。



4

きゅうかわらけじゅうたく 旧河原家住宅

旧河原家住宅の建築年代は不明ですが、建築様式などから18世紀後半と推定され、佐倉に残されている武家屋敷の中では、最も古いものと考えられています。現在地に移築するまで旧河原家住宅があった屋敷地は、松本氏屋敷ののち、文政5年(1822)前後には若林健蔵(謹右衛門)屋敷でした。その後、若林左衛門拝領地を経て弘化2年(1845)から河原喜右衛門屋敷となりました。明治時代には佐倉城外50番屋敷とされました。

旧河原家住宅は、平成元年に解体した上で移築復原整備が行われ、この時に失われていた接客部分が、弘化2年の「河原喜右衛門江屋敷相渡帳」などの調査結果に基づいて復元されました。

この住宅は、L字状に折れ曲がった草葺寄棟造であり、住宅全体における接客部分の占有面積が広く、次の間・仲の間によって家族の居住空間と明確に分離されています。客座敷には、式台のある客用玄関があり、その正面には簡素な床の間が設けられています。居間には釣床があり、主人の居室兼書斎に利用されていたと思われます。家族の日常生活には、板の間である納戸や板の間に畳を敷いた茶の間が用いられました。





5

きゅうたじまけじゅうたく 旧但馬家住宅



旧但馬家住宅は、19世紀前半の建築で、河内十郎左衛門屋敷地ののち、天保年間(1830～44)以後は100石取の井口郡内てんぽうがこの屋敷に居住していたことが記録に見えます。郡内が万延元年(1860)1月に死去すると、その養子井口宗兵衛(浅井忠の叔父)が郡内の跡式100石を継ぎましたが、この屋敷に引き続き居住したものか不明です。明治5年(1872)の時点では旧禄高20人扶持の岡田陽助屋敷(佐倉城外45番屋敷)でしたが、明治8年に旧佐倉藩士の但馬氏がこの屋敷を購入しました。

平成3年には佐倉市が復原整備し、この時に失われていた南側の土間部分を往時の状態に戻しています。この住宅は、T字状の草葺寄棟造であり、東側の居間を挟んだ南北に突き出た部分に、納戸と茶の間および土間があります。この部分が家族居住用空間であり、西側の接客部分と分けられています。

また、旧所在地と同一地点に復原されていますので、建造物のみではなく、屋敷地の形状や植栽にも武家屋敷の特徴が良く残されています。表の道路に接する部分は客向きの庭となっていて、やや広い空間が残されており、屋敷の裏手には茶樹が周りにある菜園となっており、その周辺には柿・柚子等の果樹が植えられています。



6

きゅうたけいけじゅうたく 旧武居家住宅

旧武居家住宅の建築年代ははっきりとしませんが、建築様式等から江戸時代後半に建てられたものと思われます。この住宅がもった屋敷地は、齊藤氏屋敷ののち、文政5年(1822)前後には依田平内、その後、服部用太郎が居住し、万延元年(1860)以前から明治時代初期には田島伝左衛門・田島育太郎の屋敷(佐倉城外54番屋敷)でした。その後数人の手を経て、明治33年(1900)に武居氏がこの住宅を取得しています。佐倉市では平成8年度にこの住宅を移築復原しました。この復原にあたって、本来ならば草葺屋根という旧状に戻すべきでしたが、火災防止のために不燃材である銅板葺屋根としています。

旧武居家住宅は、佐倉の武家屋敷としては小規模なものです。間取りは中央部分を境として、東側の接客部分と西側の家族住居部分に分かれています(移築前は、それぞれ北側と南側に分かれていました)。

また、玄関や長押・畳の種類等の仕様・造作が他の武家屋敷に較べると簡素なものとなっています。





7

しゅうせいきよあと 修静居跡



明治時代の道徳家、旧佐倉藩士西村茂樹は、明治5年（1872）に佐倉城外68番屋敷に寄留し、書室を「修静居」と名付けました。茂樹はここで『校正萬國史略』10巻を編さんしました。現在石碑のある土地は、修静居跡の斜め向側にあたります。

佐倉藩士西村芳郁の長男である茂樹は文政11年（1828）3月に下野国佐野藩の江戸上屋敷で生まれ、天保8年（1837）になると江戸佐倉藩邸内の成徳書院に入学しました。嘉永4年（1851）には佐久間象山に西洋兵法及び砲術を学び、諸外国との外交交渉では佐倉藩主堀田正睦をよく助けました。明治維新後の明治4年からは印旛県参事等の役職を歴任しました。

明治6年には森有礼、福沢諭吉らと明六社をおこし、また明治9年4月には東京修身学社（現日本弘道会）を設立して啓蒙思想運動を全国的に展開しました。

茂樹は明治35年（1902）に死去し、墓は東京都文京区千駄木の養源寺にあります。



8

だいしょういん 大聖院

鐫木町にある大和田山大聖院は、大日如来を本尊とする真言宗豊山派の寺院で、本尊は市指定有形文化財です。

井野の千手院の末寺であった大聖院は、密蔵院（寺崎）、玉泉寺（岩名）、正福寺（土浮）、勝蔵院（鐫木町）を末寺とし、東元寺（鐫木町）、新照寺（太田）、西福寺（大篠塚）、玉蔵院（神門）、宝鏡院（木野子）、鏡宝寺（六崎）、普門院（六崎）、養福寺（長熊）、円照寺（佐倉城内の椎木曲輪）、東徳寺（飯野）、医王院（飯野）を門徒としていました。





9

もくぞうだい にちによらいぞう 木造大日如来坐像



錦木町の大和田山大聖院の木造金剛界大日如来坐像は、本堂に安置されています。

像の高さは73cmあり、檜材を用いて、寄木造といわれるいくつかの材を組み合わせて造る工法が使用されています。目は玉眼で、像全体に漆箔が施されています。頭部には鬘がなく、宝冠ほうかんを被っています。左肩から条帛じょうはくをまとい、結跏趺座けつがふざという座禅の形をしています。

この像は、両手の親指を拳の内にして、立てた左人差し指を右の拳で握る智拳印ちけんいんという印を結んでいます。印とは、両手の指を組みあわせて宗教的理念を象徴的に表現したものです。智拳印は、仏の智の境地に入ること表現しています。

この像の製作年代は明らかではありませんが、前方観に優しい像容をもつ鎌倉時代末期の様式を示しています。光背と台座はともに後世に補われたものですが、像本体の保存状態は良好です。



10

さくらようじょうしょあと 佐倉養生所跡

佐倉養生所は佐倉藩の西洋式病院です。幕末の慶応3年(1867)9月に開業し、明治維新により翌年の閏4月には閉鎖されましたが、佐倉藩の西洋医学の進展を考えるうえで貴重な存在です。

この養生所は、万延元年(1860年)にオランダの軍医ポンペや幕府の医官松本良順(佐藤泰然の二男)らが中心として長崎に設立した「長崎療養所」をモデルにしたものと考えられます。

この養生所では、12俵半取以下の小給の佐倉藩士や領内町在の窮民の収容治療と調薬が無料で行われました。また、藩で使う薬はすべてこの養生所で公的に調薬されました。





11

まかたじんじゃ 麻賀多神社

(香取秀真生い立ちの地)



鎌木町の麻賀多神社は、歴代佐倉藩主の厚い信仰に支えられた佐倉城下の総鎮守であり、現在の本殿は天保14年(1843)に佐倉藩主堀田正睦により造営されました。

この神社をはじめとして、佐倉市内や印旛郡内に「麻賀多神社」は18社鎮座しており、古来より十八麻賀多と呼ばれます。「延喜式」神名帳にも記載があり、その古い由緒をうかがうことができます。

この麻賀多神社は、明治7年(1874)に印旛郡船穂村(印西市船尾)に生まれ、明治11年に郡司秀綱(麻賀多神社宮司)の養子となった香取秀真が、明治24年(1891)に本郷根津片町(東京都文京区)の美術講習所に入るまでの幼少年期を過ごした地です。



12

まかたじんじやいたえま 麻賀多神社板絵馬 「藤戸の渡し」

鎌木町の麻賀多神社の拝殿に掲げられているこの絵馬は、佐倉藩の御用絵師で花鳥画を得意とした黒沼槐山により描かれました。謡曲でおなじみの「藤戸の渡し」を題材としています。

「藤戸の渡し」は、備前国児島に陣を張った平賀盛に対して藤戸に着陣した源範頼方の佐々木盛綱が、先陣争いのために馬でも渡れるような川の浅瀬を教えてくれた漁夫を口封じのために殺し、その漁夫が霊となり盛綱を苦しめましたが、手厚く供養したところ成仏したという話です。

この絵馬の大きさは(額縁を含む)、縦94.5cm、横151cmで彩色されています。画中には、墨で「歳在己未小春月 槐山源隆三謹画」と記されており、小春は10月にあたります。また、額縁の下辺には「安政六己未年冬十有一月 香堂篆」の銘があります。

額縁の四周に佐倉城下の15の屋号や商標が記されていますので、安政6年(1859)に描かれたこの絵馬は、槐山が城下の商家から注文を受けたものと考えられます。

槐山の墓は鎌木町の浄土真宗重願寺にあります。





13

どう 銅 つりどうろう 銅 釣燈籠



鐺木町の麻賀多神社の釣燈籠は、台板裏に「奉獻 釣燈籠 壹対 佐倉町鎮守麻賀多神社大前 昭和五年九月三日 郷社列格記念鑄師秀真肅具」との銘があり、香取秀真(1874～1954)が麻賀多神社の郷社列格記念として昭和5年(1930)に製作し奉納したことがわかります。

燈籠は総高が25cm、台板径が33cmあります。燈籠の覆いである火袋を6区画に分け、上段を連子透し、下段を吹き抜けとし、台板・笠ともに火袋の6区画に対応していて、台板の床は空洞となっています。

古雅な作風の宮島の巖島神社(広島県)伝来の釣燈籠にその祖形を求めながら、光源に電灯を用いて実用化を図るなどの点で近代的な造型感覚を要所に示しており、緊張した線質でまとめ上げています。



14

どう 銅 まかたじんじゃいん 銅 麻賀多神社印

この印は鐺木町の麻賀多神社の印であり、印面の縦横は6cm、高さは5cmです。「大正二年十月 秀真作」の刻銘があります。

古印の研究に熱心であった香取秀真(1874～1954)が木村芳雨らと蠟型鑄印ろうがていしゅういんを手にかけていた当時の作品で、篆刻の文字「麻賀多神社」とあつて、古文字、篆書など各種の書体を造形的にまとめています。

大正2年(1913)に当時の麻賀多神社宮司であった郡司秀綱の要請により、秀真が古式により製作したものです。





15

まかたじんじゃみこし 麻賀多神社神輿



鎌木町の麻賀多神社の神輿は、『古今佐倉真佐子』によれば、当時の佐倉藩主稲葉正知が享保8年(1723)に山城国淀(京都府)に転封となる前の享保6年に、稲葉家中の藩士と町方の氏子の協力により代金300両でそれまでであった神輿のかわりに新造したものです。

製作に際しては、江戸の職人10人ばかりが勝蔵院不動堂(現佐倉幼稚園の地)で全体の骨組みをこしらえ、装飾は飾り職人が薬師堂前に小屋掛けをして作業に当たりました。完成には約8ヶ月を要したとのこと。

大きさは、以前の神輿よりひとまわり大きく、台輪が方1.47m、屋蓋が方1.65m、高さが1.94mの立派なものです。形は江戸深川の永代寺八幡の神輿を模した古様を残したものとなっています。明治8年(1875)、昭和34年(1959)に大修理が行われています。

毎年10月の麻賀多神社の祭礼に鎌木町の若者によって行われるこの神輿の渡御は勇壮なものがあります。



16

むらさきすそごどうまる 紫裾濃胴丸

鎌木町の麻賀多神社の甲冑かつちゅうには、幕末の甲冑制作者増田明珍頼母介宗家の折紙(鑑定書)とそれを納めた木箱おりがみがあります。木箱の蓋には「正愛公御着具紫裾濃御胴丸折紙」と表書きされ、蓋の裏には「御胴丸一領文化十四年出来」と記されています。

正愛公は、文化8年(1811)から文政7年(1824)まで佐倉藩主にあつた堀田正愛(1799~1824)です。

この胴丸は、信家、宗時、信安、宗光、宗安、宗政、信忠、信繩といった明珍家の一族が製作した各部分を集めて修復し、文化14年に出来たものです。その修復に際しては、「堅木瓜」(堀田氏の家紋)を裾金物などに配しており、また、威を裾の方にゆくにしたりして紫色が濃くなる紫裾濃むらさきすそごに統一して1領の甲冑に仕立て上げたものです。佐倉藩主の着具という歴史的価値とあわせて胴丸式甲冑として重要な資料です。





17

もくぞうやくしによらいぎぞう
木造薬師如来坐像
 およ りょうきょうじりゅうぞう
及び両脇侍立像



この薬師如来坐像は、鎌木町の曹洞宗医王山周徳院の境外仏堂であった薬師堂に安置されていましたが、昭和4年(1929)の薬師堂火災により境内に移されました。周徳院は元龜年間(1570~73)の創建と伝えられ、大佐倉の勝胤寺の末寺でした。

『古今佐倉真佐子』に、その昔、寺崎川でとあみ投網にかかって引き上げられたと記される薬師如来像は榧材の寄木造で、像高は94.5cmあります。彫眼に白毫を有し、頭頂部が高く盛り上がり、頭髮が縄目の渦紋状になっていることを特徴としています。製作年代は室町時代と考えられますが、鎌倉時代後期様式を有しています。ただ、この像の両手と薬壺などは、後世に補われたものです。

両脇侍の日光菩薩立像、月光菩薩立像は、ともに像高74cmで、檜材による寄木造です。頭頂宝に宝冠を着け、玉眼を入れています。上半身は裸体で、胸に銅製透彫の胸飾りを垂れています。ともに持ち物を欠き、光背と台座は後補されたものです。薬師如来とは別作ですが、ほぼ同時期に製作されたものと考えられます。



18

やり
檜 めいほそかわただよし
銘細川忠義

細川忠義(正行)は、水心子正秀(初代)の高弟であった細川正義(二代目)の次男として文化12年(1815)に生まれ、20歳の頃まで下野国宇都宮鹿沼宿の叔父細川正平のもとで内弟子として鍛冶修業しました。

天保11年(1840)以来、美作国津山藩主松平(越前)斉民のお抱え鍛冶であった忠義は、嘉永2年(1849)から佐倉藩堀田家のお抱え刀鍛冶となりました。

身長9.4cmの極めて短い正三角形のこの檜の茎には、

(表) 應長谷川重國需 細川忠義造之

(裏) 安政六年己未二月日

の刻銘がみられます。忠義の作になる檜は少くなく貴重なものです。忠義は明治3年(1870)に56歳で死去し、墓は鎌木町の真言宗大和田山大聖院にあります。





19

どう おおくにぬしのみことりゅうぞう
銅 大国主命立像



この像は、香取秀真（1874～1954）56歳の昭和5年（1930）に製作されたものです。腰の部分の背に「秀真」の刻銘があります。大国主命は『古事記』に記された出雲神話の主神で、大黒天と混同され福の神となりました。

像の高さは41cm、像・台座とも全体をひとつの型で鋳上げています。

製作方法は蠟型です。蠟型による方法とは鋳型土を内型として、これに蜜蠟をかぶせて乾燥させる。これを火で焼きなかの蜜蠟を溶かして、このあと溶解した銅を流し込んで鋳造するものです。

この像の作柄については、秀真自身が『中央公論』昭和29年（1954）1月号掲載の「私の生涯」で語った「自分のものを作り出すやうになって、若いころの天平ばりや、漢六朝に倣ったものを脱出するやうになった」という時期に近づき、作技のいよいよ充実進展を思わせるものがあります。



20

かいりんじ
海隣寺

海隣寺町にある千葉山海隣寺は、阿弥陀如来を本尊とする時宗の寺院です。相模国藤沢（神奈川県）の無量光寺の末寺でした。

海隣寺は鎌倉時代から戦国時代前期までは馬加（千葉市暮張）にありました。海上に浮かんでいた金色に輝く阿弥陀如来像（海上月越如来）が引き上げられ、その像を安置するために下総国千葉城主千葉常胤により建立されたと伝えられています。『雲玉和歌抄』によれば、海隣寺は本佐倉城主千葉勝胤により佐倉に移転されましたが、その建立の折りには歌合わせが行われています。





21

かいりんじちゅうせいせきとうぐん 海隣寺中世石塔群



海隣寺には中近世の石塔が数多く残されています。戦国時代末期に造立された石塔は五輪塔と宝篋印塔で、その石材には勝胤寺の中世石塔群や長源寺の道普上人五輪塔と同様、いずれも銚子砂岩が使用されています。

刻まれた銘文から本佐倉城（国指定史跡）の城主であった千葉昌胤（法阿弥）・千葉利胤（覚阿弥）・千葉親胤（眼阿弥）・千葉胤富（其阿弥）・千葉邦胤（法阿弥）、また、海隣寺住持（其阿弥）などの菩提を弔ったものであることが知られます。



22

ここんさくらまさご 古今佐倉真佐子

『古今佐倉真佐子』は、元禄14年（1701）から享保8年（1723）まで佐倉藩主にあった稲葉正知の家臣渡辺善右衛門守由（1701～62）が記録したものです。守由が佐倉に居住していた正徳年間（1711～16）前後の佐倉の風俗や見聞、伝説などが丹念につづられています。

成立年代は判明しませんが、守由が『古今佐倉真佐子』に続いて著述した『古今淀真佐子』の記述から宝暦3年（1753）以前には著述されていたことが知られます。また、当時の佐倉城下町の様子が詳しい附図「総州佐倉御城府内之図」は、城下町の貴重な情報を提供してくれる資料です。





23

かえんこうじょうりくず 花園口上陸図



花園口上陸図は、洋画家浅井忠が日清戦争に従軍画家として大陸に向かったおりに、花園口（中国遼東半島東岸）に軍隊が上陸した時の実況を描いたものです。この絵の大きさは縦16.5cm、横44cmで、明治27年（1894）作の水彩画です。

忠の手になる『歩兵第二連隊従軍日記』には、この時の模様が「花園口ノ沖ニ着キ、陸地ヨリ五里沖ナル海上ニ投錨シ、第一線上陸ヲ始メル比ハ、天雲ダニ無ク天気晴朗トシテ波濤静カ、軍船運送船ノ周囲ニアリテ陸兵上陸ヲ掩護ナス」と記されています。

浅井忠は、安政3年（1856）江戸の佐倉藩邸で佐倉藩士浅井常明の次男として生まれ、佐倉藩の御用絵師黒沼槐山（隆三）から花鳥画を学びました。明治9年（1876）工部美術学校の開校とともにイタリア人のフォンタネージに師事し、诗情あふれる画風の影響を強く受けて、後に「春歌」「収獲」など近代日本洋画史上における記念碑的な作品を残しています。

浅井忠は明治40年（1907）に52歳で死去し、墓は京都の南禅寺金地院にあります。また、鐺木町の真宗大谷派重願寺には浅井家の墓があります。



24

まさかどまちちそかいせいじびきず 将門町地租改正地引図

この地引図は、明治10年（1877）に、明治政府の地租改正の調査用に作成された5枚一組の図面です。この絵図は、土地台帳とともに実測図として地価および地租を決定する上で、明治政府にとって重要な書類でした。

5枚のうち文化財指定の1枚には、浅井忠（1856～1907）が江戸から佐倉に移り、文久3年（1863）から明治6年まで、すなわち8歳から18歳まで居住していた場所が示されています。忠は旧佐倉藩士であり近代西洋画界において先駆的な役割を果たしました。また、忠が学び、後には教壇にも立った郷校将門校の位置もわかります。この他にも浅井忠以外の旧佐倉藩士の居住場所を知ることができず。この図は、縦95cm、横65cmの大きさで、表題に「明治十年地租改正ニ付調査之図五葉ノ内第弐号 字平台 下総国印旛郡将門町」と書かれています。

